

「復興とは何かを考える委員会」(第1回) 主要論点

2009/06/13 文責 永松

1. あるべき復興とはプロセスで記述されるべきか、それとも目指すべき目標や価値についても踏み込んで記述されるべきか。

中林報告は、復興の基本的理念として連続復興・総合復興・地域協働復興・地域こだわり復興・複線復興の5つを提示し、また復興を考える視点として7つのP(方針・計画・過程・被災者・参加・政策・シンボル)を提示した。これらはいずれもあるべき復興のプロセスやその留意点を明らかにしようとしたものである。

他方で中林報告は、復興度を示す指標、すなわち復興の具体的な目標については、人それぞれであり、地域によっても異なるとし、一意に決められるべきではないというスタンスであった。

これに対し、山中委員からは「何を復興するのか」という中身に踏み込んだ議論がなければ、そもそも最適なプロセスを議論することが出来ないのではないかという指摘があった。

中林報告にも『地域が自立的に発展していけることが「創造的復興」である』『これからの復興は量ではなくて質を重視すべき』といったように、復興の理念の具体的な内容に踏み込んだ発言もあった。多様な意見の存在を認めながらも、復興の目標や理念についてどこまで普遍的なものが存在し、記述しうるかは重要な論点である。

2. 「復興」の主語は誰か。

中林報告は主に行政が中心となって策定する復興計画を意識したものであった。これに対し、木村報告は、個人が復興するための5つの要素として「住宅・集落・仕事(収入)・再建資金・文化」を提示し、被災者個人が復興するための具体的な条件を明らかにしたものである。田中委員が指摘したように、この両者は全く次元が異なるものであり、同列に議論することは出来ない。

3. それぞれの主語における「復興」の関係はいかにあるべきか。

渥美委員からは「誰が誰の生死をコントロールするのか」という論点提起があった。委員会では、「官」の決める復興が真の復興ではない、ということについてはほぼ一致した見解があった。だがそれでは、被災者の決める復興が真の復興かと言えば、必ずしもそうではない。中林報告では、被災者一人一人にとっての多様な復興と、被災地域・社会の復興とは必ずしも一致しないことを指摘し、それらを対等のものと捉え、合意形成が課題であるとしている。だが、上村委員からは、長期的な地域の復興を考える際に、現在の被災者に問いかけるのは必ずしも適切ではないのでは、という指摘もあった。都市部において被災者の多くが賃貸居住者であるケースでは、被災者ではなく地権者の復興が優越することもしばしばであるという指摘もあった。

ある主体にとっての「復興」が、他の主体にとっての「復興」に対しどのような関係を持ち、どう調整していくのか。

4. 復興の指標は何か

何をもって復興したと言えるのか、中林報告では、復興のプロセスを2次元のグラフで表現した。縦軸を復興度とし、横軸を時間としたものだが、縦軸を何で評価するかが議論となった。

中林報告では、縦軸は個人や地域によって望むものを様々に置き換えて議論するべきだとし、その例として、幸福感、満足感、達成感などを示した。また復興を指標で表現することについて、上村委員からも現場の感覚として必要だという認識が示された。

他方で、山中委員からは、これまでも幸福量や福祉を指標化する試みは世界中で行われながらも成功していないこと、結果的に計量化しやすい経済的な指標に置き換えられてしまう危険性を指摘し、復興の指標化について反対した。

5. 復興は防災の一部か

中林報告では、復興は防災のサイクルの一つであるという認識が示され、被災前よりも安全になることは復興の要件の一つであると主張された。木村報告も、同じ立場に立ち、被災前よりも安全になることは絶対的な条件とされた。

これに対し、山中委員からは、復興と防災は相対立してもいいのではないかという意見が提示された。

6. 復旧概念との関係はどうか

中林報告では、「復旧」を従前の水準を回復することと定義し、それとの関係で「復興」を論じた。ただ、このような議論の仕方が良いのかどうかということについては何人かの委員から疑問が呈された。

7. 復興は迅速にやらなければならないのか

中林委員はその報告の中で間接被害の軽減が復興の一つの機能であるとし、できれば迅速にやらなければならないと論じた。山中委員からはこれに対して、「復興は迅速にやらなければならないのか」という指摘があった。

8. その他

- ・合意形成とは何か（渥美）
- ・「復興」という言葉がそもそも誤解のもとでは（山中）
- ・我々が復興をコントロールできるという前提が誤りでは（永松）
- ・住宅被害を前提として復興を考えて良いのか（山中）
- ・計画を抽象的に論じることは出来ないのか（渥美）
- ・（木村報告に対して）「時間の復興」季節感の回復も必要（渥美）